平成12年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

「巢」と「埒」

時々、鳥の「巢」と「埒(ねぐら)」の違いについて聞かれることがあります。

巢は、鳥が繁殖期に卵を産み、ヒナを育てる場所のことで、この時期、多くの鳥は巢やその近くを寝る場所を選びます。ヒナが無事に巣立つと、巢は生活の場所としては、ほとんど利用されなくなります。一方、埒は広い意味で鳥が寝る場所のことをいいます。山の鳥の場合、単独ないし数羽で木の茂みや物かげに隠れるようにして寝ることが多いのですが、その場所が埒です。埒の作られ方は、鳥の種類や季節により変わります。どうするかというと、非常にたくさん数の鳥が集まる集団埒になり、注目されることがあります。

青梅よりも下流になりますが、多摩川と秋川の合流地点は、河原も広くアシ原も見られます。

今年の7月上旬頃から、日が沈み、薄暗くなるとこのアシ原の上を1000羽近いツバメの群れが飛び交うようになりました。その年巣立った若いツバメたちは、河原のアシ原などに集団埒を作り、夜を過ごすことが知られています。このアシには、周辺で巣立ちしたツバメたちが集まったのでしょうか。この埒のツバメの数は8月上旬を過ぎると目に見えて減り始めました。南の国へ移動する渡りが始まったためだと思われます。

もう十数年前の初冬、新町にある若草公園の東側に数百羽のムクドリができたことがあります。夕方、畑に植えられた常緑の植木の林に、ムクドリは秋から冬にかけて、大きな群れを作ることが多く、このような群を「ムクドリ玉」ということがあります。当時も、大きなムクドリ玉が夕方の空を繰り返し旋廻するのが見られました。この埒は、冬の半ばに自然に消滅し、周辺には静かな夜が戻ってきました。

なぜ、このような集団埒が作られるのか、まだ定説はありません。外敵に対する集団防衛、仲間同士の情報交換、冬の夜、多くの鳥が集まって寝ると暖かい、安全に寝られる場所に自然に集まるなどなど、多くの説がありますがどれも仮説です。おそらく、いろいろの要因が複雑に絡み合っているのでしょう。最近では、セキレイの仲間のハクセキレイが、都市に建つビルや橋、繁華街の街路樹などに集団埒を作ること注目されています。鳥たちは、人工的な環境の中にもメリットを見出し、そこを積極的に利用し始めているようにもみえます。

青梅市内では、これまでに顕著な壱が見つかったことはあまりないようです。しかし、市域の東部のように市街地化が進んでいるところでは、意外な壱が見つかる可能性があります。

壱を見つけるには、夕方、鳥の群れの飛んでいく方向を地図に記録しながら追跡し、少しずつ範囲を狭めていきます。何日もかかることがあり、一人で行うとなかなか大変ですが、宝探しのようにスリリングな楽しさがあります。鳥が群れを作りやすい秋から冬は、こうした調査を行うのにいい季節です。

(文責 櫻岡幸治)